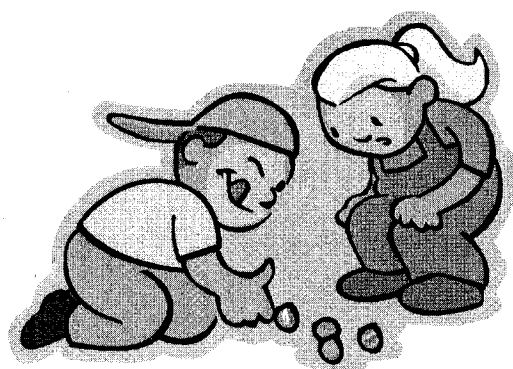


# 第Ⅵ章

## つぎにつながる評価を！ －総合評価－



## この章では…

総合評価のポイントについてみていきます。短期目標そして長期目標の評価記述の方法を取り上げます。さらに、数値で評価することが難しい課題(作文など)の評価方法についても取り上げたいと思います。

### ● 総合評価でのポイント



ここでのポイントをみてみましょう。

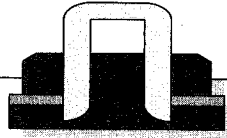
#### 総合評価でのポイント

- ① 目標や達成度を適切に評価する
- ② 指導内容や方法を評価する
- ③ 来学期・次年度の計画を作成する(ビジョンをもつ)
- ④ 保護者への報告・説明を行う

## ● このプロセスでとらえること ～「えがお君の場合」～

ここでは、先のポイントにしたがって次のような内容をおさえます。

例)



1学期の短期目標は「3年生の漢字100字(チェックリスト「悪～研」について、間違った漢字を示された際、その部分を修正できる(80%以上)」「クラスの漢字テストで毎回10問中7問は正解する」「指導者によるモデルの作文を見た後、(指定された)接続詞を使って10行程度の作文を書くことができる」であった。すべて目標を達成することができた。漢字については、ぎりぎりであったが、作文については、原稿用紙1枚以上の作文を書くことができた。

(←ポイント1)

漢字の形を捉えやすく、また記憶しやすくするため、意味づけしたり、言語化するといったスキルは、本人にとって有効であった。作文については、書けるようになったものの、書字に時間がかかることや、構成の複雑な漢字の誤りもみられるため、パソコンの導入を早速、来学期から考える必要があるようだ。(←ポイント2)

来学期は、引き続き、3年生相当の残りの漢字について取り上げること、クラスのテストでは10問中8問正答をめざすこと、会話文を用いて20行程度の作文を書くことを目標にしよう。

(←ポイント3)

えがお君の個別の指導計画を保護者に渡し、説明を行った。漢字テストや作文を家でみせるなど、自信をつけている様子がみられるとの報告があった。(←ポイント4)

## ● 評価の記述の仕方

短期目標を具体的に立てれば、日々の指導の目標が明確になり、評価も容易になります。日々の評価が明確であれば、短期目標の評価も明確になり、長期目標の評価も容易になります。すなわち、目標を具体的に立てること、日々の評価をしっかりとすることが重要になってきます。

数値的な評価の仕方については前章でふれました。ここでは、それら数値的な評価結果を受けた総合評価の記述の仕方についてみていきます。短期目標から次の短期目標へ移る際の評価、1年を終えた段階での長期目標の評価としても以下のような記述例は使うことができます。

### 評価結果の記述例

- ◇目標は達成できた。次の目標に進む。
- ◇向上はみられたが、目標達成にはもう少し時間が必要である。
- ◇予測していたよりも、向上がみられなかった。
- ◇欠席や遅刻が多く、(物理的な結果)向上がみられなかった。
- ◇目標として適切ではなかった。設定目標が高すぎた。

## ● 数値化するのが難しい課題をどう評価するか

たとえば、算数・数学のような領域・課題であれば、「10問中8問できた」「○か×か」など、比較的是っきりと評価できます。しかし、数値化するのが難しい課題についてはどのように評価すればよいのでしょうか？数値化するのが難しい課題の一つに作文が挙げられます。作文などは、読み手によって感じ方も様々であり、数値化して評価できるものでもありません。しかし、数値化できないにしても、共通の視点をもとに評価することで客観化は可能になると考えます。そこで考案したのが次頁のシートです。「9. 全体的な評価」が、作文の完成度(水準)の評価にあたります(すなわち、数値が高い方が優れた作文と判断できます)。それ以外の評価の視点は、必ずしも、作文の総合評価ではありません。むしろ、子どもが作文を書く過程の把握(アセスメント)といえるでしょう。これらの視点にもとづいて評価した結果は、次にターゲットになる目標は何か、どのような指導・支援が必要かを考える際に役立ちます。

例えば、誤字脱字が多い作文になってしまうのは、一度も再読しないことからくることがこの評価からわかれば、「6. どれくらい頻繁にストップして再読したか？」の数値が高められるよう、それを目標にしたり、再読を促すような指導や支援をいかに行うかなどを考えます。このような目標で一定期間指導を行い、再度評価したところ、「6. どれくらい頻繁にストップして再読したか？」が「1」から「4」に上がり、「8. 変化したのは？」の項目で「文字や語を正しく書くこと」に○がつけば、この目標は達成されたとみなすことができるかもしれません。このように形成的な評価にも利用できます。

ここでは、作文の評価についてえがお君を例にみていきます。

## 作文の評価 ～「えがお君」の場合～

### 作文の評価

1. テーマは 教師が選んだものか？( ) 子どもが選んだものか？(○)
  
2. テーマについての子ども側の要因
 

	低い		高い
事前の知識	1	2	③ 4
関心	1	2	3 ④
  
3. 子どもはどのことに時間を費やしたか？
 

テーマを考えることに( )	教室の外での調査に( )
テーマは決まったが、内容を考えることに(○)	文法的な構造に( )
文字の想起に(○)	内容について話すことに( )
観察できなかった( )	
  
4. どのような手段で行ったか？それについての能力は？
 

手書き(○)	ワープロ( )	口頭( )
	低い	高い
流暢さ	① 2 3 4	
  
5. どれくらい支援を求めたか？
 

	めったにない	しばしば
1	2	3 ④
6. どれくらい頻繁にストップして、再読したか？
 

1	②	3 4
---	---	-----
7. 再読することで変化が生じたか？
 

1	2	3 ④
---	---	-----
8. 変化したのは(最初の原稿から最後の原稿の間で)
 

文字や語を正しく書くこと (○)	文法の正確さ( )
語い( )	形容詞や副詞の付加(○)
段落の移動( )	題名(○)
細かい文(詳細さ)の付加(○)	文体の調整( )
その他( )	
  
9. 全体的な評価
 

	低い	高い
主要とするテーマと関連している	1 2	③
論理的である	1 ②	3
伝えたい内容が明瞭に書かれている	1 2	③
  
10. 子どもは自分で最終的な作品を誰と共有したか？
 

クラスで読み上げた( )	小さなグループの前で読み上げた( )
印刷した(クラスの出版物、学校新聞等)(○)	教師に読み上げた(○)
保護者に読み上げた(○)	誰とも共有していない( )

## ●ゴールはつぎのスタートラインにつながる

評価するのは子どもに対してのみではありません。子どもの目標達成のために用意した、こちら側の手だて、支援についても評価することが重要です。子どもがどういう能力やスキルを身につけたかというのも重要な情報ですが、どういう手だてが効果的であったかというのも、とても有益な情報になります。その子どもにとって効果的なかかわり方や手だてを先生が発見しても、それがうまく引き継がれず、つぎの年の先生がまた0から始めるといったことが少なくありません。このようなことは、子どもそして先生にとっても幸せなことではないでしょう。ぜひ、この個別の指導計画をバトンとして機能させたいものです。その子どもをよく知る先生から、つぎに子どもの力になる先生へ大まかな指針、方向性を伝えることで、道に迷うこともなくなるでしょう。

個別の指導計画のいちばんの主役は、子どもでありその保護者です。保護者にはもちろんですが、子どもともゴールに対する評価結果について話し合いたいものです。そのためにも、目標を立てる段階から、わかりやすいことばで立てておくことが重要です。子ども本人がどんな目標をめざして進み、どこまで達成できたかを知るのは当然のことかもしれません。



## 個別の指導計画がもたらすメリットは

### ～ 通常の学級での実践研究結果から ～

LD等の子どもが在籍する通常の学級の先生と、1年を通じて個別の指導計画に関する研究を行ってきました。個別の指導計画を立てることが、対象とする子どもにとってメリットであることは疑いありません。しかし、果たしてそれだけでしょうか？

この先生が個別の指導計画を作成して取り組む前後の算数テストの結果では、対象とする子どもの得点だけでなく、クラスの平均点についても向上がみられました。確かに、子ども自身のがんばりやその他の要因が複雑に絡んだ結果と思われます。しかし、個別の指導計画を作成し始めた担任による支援が、その1つの要因になっていることも十分に考えられるのです。

研究の中で印象的だったのが、個別の指導計画を作成することで、次第に、先生の中に子どもをみていく際の視点が構造化されていった点です。つまり、子どもの実態を捉えた上で、どのような目標を設定することが必要かを考え、目標を達成するための有効な手だてを考案し、それら目標や手だてについて評価を行い、それをまた目標や手だてに活かしていくという視点です。このような一連の論理的なサイクルを獲得したことが、対象とする子ども、ひいてはまわりの子どもたちへの効果へとつながったと思われました。先生自身の思考が構造化されることによって、実際の指導も構造化されていったといえます。このことは、個別の指導計画の内容や言動からも、先生が明確な指導仮説をもって子どもたちに関わっていたことは明らかでした。

個別の指導計画を立てて2ヵ月後に「個別の指導計画を立ててみての感想は？」というインタビューを先生に行いました。

「その子を細かくみるようになった」

「その子どもへの声かけを積極的に行おうという意識が高まった」

「個別の指導計画という記録を残すことによって、以前の様子や経過の振り返りができた」

「自分が行った手だてについての評価を行うことができたのはよかった」



「評価を行う必要があるので、子どもへの注目が促された」

「教具の工夫や数値の工夫などは、本児だけでなく、他の児童の理解を深める上でも大変効果的だった。」

「本児への支援ということで考えをすすめたが、結局はクラス全体にとって、わかりやすい授業になった」など……

これらが先生の口から発せられた感想でした。



こうしてみると、個別の指導計画を作成することによるメリットは、その子どものためだけでなく、まわりの子どもたち、そして作成する先生自身にもあるような気がしてくるのです。

